# ようこそ校長室へ！

Ｎｏ．50
令和６年２月７日
発行 ： 貝 塚 敦

| に | にこにこ笑顔で | い | いつもみんなで | つ | 紡ぎ繋げる心で | に | 日本一をめざすのだ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|


## 「ひまわり」よりも「たんぽぽ」が好き！

### ＜「評価」を通して見えるもの③＞

実際のところ人間は平等ではないと思います。生まれた時点でスタートラインは違っているのです。経済的に恵まれた家庭に生まれ育った人間もいればそうでない人間もいます。生まれながらに頭脳明晰、容姿端麗の人間もいれば、自分自身そう思えない人間だっています。生まれながらの自分を取り巻く『環境』や、持って生まれた様々な『資質』や『能力』には差があるのは当然です。その差は、自ずとその後の人生や道のりにも少なからず影響をもたらす場合が大です。

若い時分は、私だって、（ああ俺もキムタクのようにかっこよく生まれてきたら、きっと女子生徒のあこがれの的だったろうなあ。少なくとも、廊下を通るとみんなよけて通るような、こんなみじめな思いはしないはずだ。いや待て、キムタクのようだったら、そもそも学校の先生なんてやってやしない。でも、工藤静香はタイプじゃない。もっと好みの女優さんと結婚して・・・・・）なんて夢想したのが、退職が見えてきたこの年になって何と虚しいことか。

ただ、スタートラインは違っても、走り始めてからのスピードやスタミナは、その人間の努力次第です。そして、その努力が正当に評価されることこそが大切だと思うのです。

学習評価の観点別評価３観点に、「主体的に学習に取り組む態度」という項目があります。この評価は、以前までですと、誠実に学習に励んでいる、発言や発表が活発だったり提出物がしっかりしている、つまりまじめに一生懸命授業や課題に取り組む態度が表れていれば、それなりに高い評価をもらえたものでした。ですが、今は単純にそうではありません。

例えば、漢字や英単語を覚えようと何度も何度もノートに繰り返し書きます。バレーボールの技術を磨きたくて、何球も何球も球出しをしてもらってレシーブ力を磨きます。涙ぐましい努力です。

しかし、もし間違えた漢字や英単語を何度も書いていたとしたら、

もし間違った方法でレシーブを繰り返ししていたとしたら。自分がやってきたことは大いなる時間の浪費であるばかりか、間違った知識や方法を身に付けるだけで、逆に何の役にも立たないマイナスの努力です。結果はどうであれ一生懸命頑張ることだけを美徳だととらえてはならないのです。

このように、これまでなら、汗をかいた分の「粘り強さ」や「ひたむきさ」がそれなりに評価されたかもしれません。しかし、新学習指導要領の学習評価では必ずしも高い評価にはならないのです。それは「自己調整力」が欠如しているからです。

自分の学びを振り返り、自己評価を繰り返し、間違ったやり方を是正したり改善したりすることや、自分の学習の状況を把握し、自分の学習を調整する力こそ、今子どもたちに求められています。

しかし一方で、学習面での努力に「自己調整力」が必要だとしても、一般生活では、ともかく額に汗して誠実に頑張る人間が報われる社会であってほしいと切に願うのです。それは学校でもかくあるべしだと思います。

とかく世の中は、イメージ第一主義、中身より見た目勝負、ビジュアルが優れている方が有利、的なところが多いのです。学校でもそうです。ふだんはでたらめな言動をしていても、ちょっとかっこよかったり、スポーツマンだったり、おもしろいことを言ったり、リーダーシップがあったりしてクラスの人気者だったりする子もいます。一方、おとなしくて無口だったり、ちょっと人とは違った発想や行動をとると、敬遠されてしまうような子もいます。そんな不合理な理由で、いじめや嫌がらせにつながることが現実的にはあり得ます。

私が若い頃に担任をしたクラスに、クラスで一番無口でおとなしくて、一言で言えばいわば地味で全く目立たない存在だった、Ｂ子という女の子がいました。

ある日のこと、学年主任の先生からこう言われました。「先生のクラスの教室は、机と椅子がいつも整っていてきれいな教室だね。実に気持ちがいい。たいしたもんだ。」と褒められました。

理由は明白でした。部活動を終えて競技道具をしまいに来る途中に、Ｂ子が、だれもいない放課後の教室に立ち寄って、毎日、机と椅子を縦横きっちり揃えたり、床に落ちているプリントを拾っては片付けていてくれていたのです。時間にすれば たった３，４分のことです。でも一日も欠かさずにしてくれたのです。その事実を知っ

ていたのは、ごくわずかな人間でした。彼女はクラスや学校で決して親しくする友人が多いとは言えない子でしたが、私はそんな彼女を心から尊敬していました。

　学校は勉強が本分ですが、清掃、奉仕活動、学校行事、係活動、委員会活動などに熱心に取り組む子どもが私は大好きです。初めから兼ね備えた能力や生まれ育ちなどに関係なく、その人の心持ち一つで誰でも平等に取り組めることがあります。みんなのため、公のために役に立つ仕事や役割があるのです。そんなことに、人知れず黙々と取り組める子は本当にすばらしいと思います。クラスや学校を本当に陰で支えてくれているのは、こんな子どもたちなのだろうと。

　その年の終業日の最後の終学活に、Ｂ子に、『ダンディライオン賞』と名付けた大きな賞状を用意し、クラス全員の前で表彰しました。『dandelion』。道端の目立たない場所でもしっかり根を張ってたくましく野に咲く『たんぽぽ』のように、人知れずクラスを支えてくれたＢ子にふさわしい冠名だと考えました。 Ｂ子の「賞状をもらったの生まれて初めてです。」といううれしそうな顔が忘れられません。
　黙々とクラスや学校を支えてくれている子たちが正当に評価され、まじめに頑張っている人間に陽のあたる、そんな学校、そんな社会であるべきです。
　「評価」とは、一生懸命頑張っているのに陰に隠れて見えにくくなっている姿を表に出して、そこに光を当てる取組でもあると考えます。

　ある日、クラスでこんなことを子どもに尋ねたことがあります。
　「このクラスの担任が俺じゃなくて、キムタクようなイケメンだったらどうだ？」生徒はシラッとしながら、「あり得ない。」「毎日一番に学校に来る。」「他の学校のみんなに自慢する。」などと勝手なことを言い出しました。しかし、「俺は、キムタクなんかより先生の方が何倍もかっこいいと思います。」（さすがクラス１のムードメーカーのＴ男よ。よくぞ言ってくれた。お前だけはわかってくれるよな。）
　「先生、明日の学活、学級レクでドッジボールにしませんか？」
「・・・・・」